

かえでの森

第 6 9 号 2 0 1 9 年 1 0 月 1 日

発 行 所／神山復生病院 〒412-0033御殿場市神山109 (Tel)0550-87-0004 (Fax)0550-87-5360
(E-mail)info@fukusei.jp (ホームページ) <http://www.fukusei.jp/>



《 理 念 》

神山復生病院は キリストの愛に基づいて 病める人も健やかな人も 神によって創られた人間として
喜びも苦しみも共にしながら 一人ひとりの命を大切にし 希望をもって医療と福祉に献身します

《 基本方針 》

- 1 患者様本位の医療
患者様一人ひとりの生活を重視し、地域のニーズに応えるサービスを提供します
- 2 職員の人材育成
優れた人材を育成するため、研修を充実し、専門・認定資格の取得を支援します
- 3 経営の安定化
病床利用率を高め、病院の経営状態を安定化します
- 4 地域包括ケアシステム構築への貢献
介護医療院と在宅事業部との連携を密にし、在宅医療・福祉に貢献します



みくりや地域の看看連携

看護部長 杉山美貴子

日本は、2025年問題を目前とし、地域包括ケアシステムの構築を急ピッチで進めております。その様な世の中の流れを受け、神山復生病院でも病院の基本方針として、地域包括ケアシステム構築への貢献を掲げており、微力ながら取り組んでおります。しかし、その過程において、地域にある多くの関係機関と、緊密でスムーズな連携を取る必要性を強く感じておりました。

そのような折、静岡県看護協会の地域包括ケア推進支援モデル事業として、「看看連携」をはじめることとなりました。「看看連携」とは、地域の看護職同士が、対象者様の生活を支えるために、同じ目標をもって信頼しあい、対等な立場で協働することと定義しています。つまり、多様な部署や、機関に属する看護職同士が顔の見える関係を構築し、互いの役割を理解することで、コミュニケーションの円滑化を図ります。その過程において、情報共有していくことで、対象者様を地域の看護職みんなで作っていきたいと考えています。

みくりや地域の看護職が主体的につながり、連携することで、地域包括ケアシステムを看護の力で進めていくため、地域の基幹病院である富士病院さんを中心とし活動を始めています。住み慣れた地域で長く生活出来るよう、Aging in placeの実現をめざし、課題解決に向けて努力中です。この活動を通して、みくりや地域の医療の質向上に貢献できればと願っております。地域に向けた研修会等も企画しておりますので、どうぞたくさんの皆様のご参加をお待ちしております。



防災研修

事務部 後藤和也

今年度の防災研修会は、御殿場市役所危機管理課の職員の方々をお招きし、地震災害、及び富士山火山噴火災害への備えについて、直接お話をうかがうことのできる貴重な研修となりました。

講話の冒頭には地震による被害想定についてのお話がありました。

御殿場市では南海トラフ連動地震による被害は沿岸部に比べて少ないと想定されており、相模トラフ地震の方が被害が大きいと想定されているそうです。

また、神奈川県との県境には断層が3つもありますが、断層型地震の発生確率は、100年以内で10%以下という調査結果が出ているそうです。

防災管理の担当者として、特に富士山の噴火に合わせた避難準備、及び御殿場市の対応について詳細にうかがうことができたことは、避難訓練を行う上でも学ぶものが多かったです。また、地域の自主防災組織との連携についても、今後、地域の防災訓練に足を運び、どのように連携を取るべきか確認を行う必要があると感じました。



危機管理課 山口氏



富士山噴火の備え



防災訓練

事務部 後藤和也

神山復生病院では、毎年、年2回の防災訓練を行っています。今回、9月6日に行われた訓練では、非常用電源確保訓練、屋外炊出し訓練を実施しました。

非常用電源の確保訓練は、停電になった時、患者様に必要な機器が継続利用できるよう、電気を供給する為に行っています。特に栄養課では委託業者と共に訓練を行っています。発電機の稼働方法から温冷庫への接続方法を確認しました。

事務室においては、落雷による停電に対応しなければならない為、新入職員に防災監視盤の注意事項を説明しました。なぜ操作が必要となるのか、雷鳴が聞こえたら準備をする内容等の確認を行いました。

屋外炊出し訓練では、栄養課と委託業者のエームサービスによる非常食の提供が行われました。試食をしましたが、主食・副食ともに美味しく、特にポテトサラダは非常食にありがちなボソボソした物ではなく、しっとりとしていて食べやすかったです。五目御飯も、残ってしまった分はおにぎりにしていただいて、しっかり完食しました。

今年も台風による被害が全国で発生しています。特に水害や停電被害が多い為、当院もしっかりと災害に備えていきたいと思えます。



(メニュー)
五目御飯
サバの味噌煮
ポテトサラダ
味噌汁
白桃



非常用電源の操作の訓練



カトリック医療団体協議会 第3回全国大会

シスター徳永美智子

去る8月2日と3日に当院は、長崎で開催された「日本カトリック医療施設協会」、「日本カトリック医師会」、「日本カトリック看護協会」で構成される日本カトリック医療団体合同協議会に参加しました。日本全国22都道府県から約250名が集まり、当院からも3名が出席しました。この医療団体協議会は3年毎に行われる集まりで、今回の大会テーマは「永井 隆について考える」でした。

皆さまも「如己愛人（にょこあいじん）」という言葉をご存知だと思います。「如己愛人の言葉を残した永井隆は明治41（1908）年2月3日に島根県松江市で生まれ、長崎医科大学を卒業、放射線医となり、放射線診療で大量被ばく（推定）。慢性骨髄性白血病を発病（昭和19年6月）。昭和20年8月9日午前11時2分に原爆が長崎に投下され、被爆。長崎医科大学附属医院被災。永井隆は頸動脈分枝切断により出血多量の身でありながら、被爆直後より被災者の救護に奔走した。当時、長崎医科大学附属医院では890名の医学生・看護師・医者他医療従事者が亡くなっているが入院患者は誰も亡くなっていないそうである。同年（20年）10月、浦上の地に戻り、再建の道を歩むが、翌年昭和21年暮れには病状が悪化し、寝たきりの生活を余儀なくされる。」この永井隆のために浦上のカトリック信者によって建てられたのが「如己堂」であり、そこで書かれたのが「長崎の鐘」や「この子を残して」など17冊に及ぶ著書を残しています。著作で得た収入の大半は、長崎市の復興や浦上天主堂（浦上カトリック教会）の再建のために寄付をし、又、被災にあった子供たちのために図書室を設け、生きる希望を人々に与えています。

昭和26年4月、「乙女峠」脱稿を最後に容体が急変し、同年5月1日午後9時50分に2人の子どもに看取られてこの世を去りました。享年43歳でした。

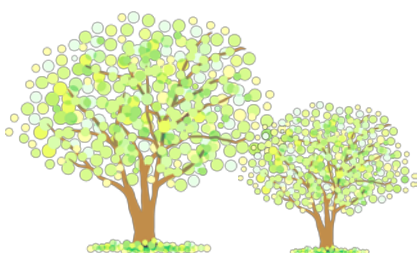
この全国大会で強く考えさせられたのは「世界平和」です。教皇ヨハネ・パウロ二世が日本を訪問され、広島の実験ドームや長崎での教皇のメッセージを思い出します。「戦争は人間の仕業です」永井隆博士から学んだのも「平和を祈る者は、一本の針をも隠し持っていてはならぬ。自分が・・・たとい、のっぴきならぬ破目に追い込まれた時の自衛のためであるとしても・・・武器を持っていたら、もう平和を祈る資格はない。」（「平和の祈り」（「平和塔」）より）。置わずか2畳の如己堂で「わがいと子よ。なんじの近き者を己の如く愛すべし」という言葉を残しています。如己愛人とは己の如く人を愛することを意味します。復生病院の理念に謳われている「キリストの愛に基づいて・・・」も人を大切に、己の如く人を愛することに結びついています。日々の看護・介護の中で如己愛人が生かされるように。又、世界平和と真の愛のために祈りましょう。



如己堂 室内



如己堂 外観



今回のおすすめ



（紹介者
ホスピス病棟 久保智子）

「詩ふたつ」 長田 弘 （クレヨンハウス 2010年）

読書の秋に、素敵なお詩の本を紹介します。

この本は長田弘さんのふたつの詩にグスタフ・クリムトの樹木や花々の風景画が添えられた詩画集です。

『花を持って、会いにゆく』『人生は森のなかの一日』というふたつの詩は長田弘さんが奥様を亡くされたときに作られ、「生と死」「人生」「絆」についてゆっくり語りかけてくれます。収められている21点の風景画は、装飾的、官能的と言われているクリムトのイメージと少し違います。

わかりやすい言葉で書かれた詩と柔らかい色調の絵画は読む人の心を温かく包み込んでくれます。ぜひ一度手に取ってみてください。

外 来 担 当 表

心療内科、緩和ケア外来は予約制



	月曜日	火曜日	水曜日	木曜日	金曜日	土曜日	日曜日
午 前	内科(平田) 心療内科(飛澤)	内科(平田)	内科 (平田・江藤)	内科 (平田・江藤)	内科(江藤) 心療内科(飛澤)	内科 (第2・5 岡部) (第1・3・4 中尾) 心療内科(飛澤) 皮膚科	休 診
午 後	休 診	休 診	休 診	緩和ケア外来 (平田)	休 診	休 診	

※ 毎週土曜日の内科外来を行っております。皆様ご利用下さい。

※ インフルエンザの予防接種が始まります。ご希望の方は受付または外来までお願いします。

皮膚科外来予定表



10 / 5	診察日	太田医師
10 / 12	診察日	太田医師
10 / 19	診察日	石地医師
10 / 26	診察日	石地医師

11月以降の診察は HP にてお知らせいたします。
もしくは、お電話にてお問い合わせ下さい。



岩下壮一特別展

記念館の入り口にあるいちょうの木に銀杏が実ってきました。今年は台風で枝が折れてしまいましたが、いちょうの木の枝に掛かる掛からないかのところに電線が通っています。実は植えた当時にも電線が通っていました。このいちょうの木が植えられたのは岩下神父が院長の昭和14年、創立50年の記念に植えられたものです。その時、「電線に掛かる様なところに植えて大丈夫ですか？」と岩下神父に尋ねたところ「この木が電線に掛かる頃にはこの病院はないでしょう」と答えたそうです。この言葉の意味しているのは、有効な薬が出来て治る病気になって病院がなくなるというのか、当時、駿河療養所の構想があがっていた時なのでいずれは統合されると考えての言葉だったのか、今は知る由もありませんが、ハンセン病に有効な薬もできて治る病気になった今でも、神山復生病院は時代の変化に対応しつつ存在しています。

岩下壮一は明治22年9月18日生まれ、奇しくも神山復生病院の創立と同じ年に生まれています。運命というか何か大きな力があるように感じてしまいます。

現在、復生記念館の別館で「岩下壮一誕生130年記念 岩下壮一特別展」を12月まで行っています。写真や書籍などこの期間だけの展示も多いです。多くの方々の来館をお待ちしています。

(記念館 森下裕子)

9月25日撮影



編集後記



今回、台風により日本各地で被害がありました。当院でも災害への備えとして、毎年、定期的に今回の広報誌に掲載している防災研修・訓練を実施しています。現在日本ではラグビーワールドカップが開催されています。日本代表の選手の皆さん、日本全国に元気を与えて下さい。ラグビー日本代表を応援しましょう。頑張れ日本代表！

次号も、お楽しみに～



も